

別紙（事後評価書）

令和4年度文化芸術振興費補助金（劇場・音楽堂等機能強化推進事業）

通し 番号	9	事業区分：劇場・音楽堂等機能強化総合支援事業 助成対象団体名：公益財団法人愛知県文化振興事業団 施設名：愛知県芸術劇場
<p>助成対象活動に関する評価</p> <p>（妥当性）</p> <p>当該劇場・音楽堂等は、愛知県が策定した「愛知県文化芸術振興条例」及び「あいち文化芸術振興計画2022」を踏まえて5つのミッションを設定している。また、ビジョンは「事業」「経営」「人材雇用」の3種に分類され、「事業」にかかわるビジョンを5つ、「経営」にかかわるビジョンを1つ、「人材雇用」にかかわるビジョンを1つ掲げている。各事業はそのいずれか（あるいは複数）に基づいて計画されている。事業計画にはミッションとの整合性があり、施設の強み・特色、地域との関係性、目標・指標等とも一定程度の関連付けがなされている。</p> <p>当該劇場・音楽堂等の課題の1つである栄北地区の活性化については、商業施設や観光施設と連携した「久屋ぐるっとアート」が、平成30年度から継続的に実施されている。「祭」としては小規模なものであり主催者としての劇場の存在感が参加者に十分に伝わりにくく、支出内容にも疑義が残ったものの、当該劇場・音楽堂等と地域との成熟した関係を証明する取組であり、ミッション5との整合性が高い。</p> <p>以上のことから、事業計画に必要な構成要素が有機的に関連し、5年間を通して当初の予定どおりに事業が推進されたことがおおむね認められた。</p> <p>（有効性）</p> <p>アウトカム①「『創造する劇場』として内外に認知度向上」及びアウトカム③「一生に一度は劇場に足を運ぶ機会を提供」の一部については、指標及び目標数値の設定が不十分で、実績にもばらつきがあり、有効性が十分であったとは認めがたい。</p> <p>一方、当該劇場・音楽堂等の設定した評価指標のうち、目標値を大きく上回ったものが平成30年度3件、平成31（令和元）年度4件、令和2年度5件、令和3年度5件、令和4年度10件であった。このうち「外部研修受講者数」は平成31（令和元）年度から連続して高レベルで達成しており、高く評価できる。以上のことから、一部の指標の設定には問題があるが、おおむね目標を達成し、一定程度のアウトカムの発現が認められた。</p> <p>（効率性）</p> <p>事業はほぼ計画どおり実施されており、事業期間は適切であったと認められる。</p> <p>また、事業費については、要望時の予算額と報告時の実績額とを比較すると、一部の費目に増減があったものの、ほぼ計画どおり執行されており、適切であったと認められる。ただし、「ファミリー・プログラム宮沢賢治『風の又三郎』」（令和3年度初演、令和4年度再演）は、普及啓発事業としては予算積算が過大である。</p> <p>（創造性）</p> <p>公演事業のうち音楽分野では、平成30年度の「聲明」が日本音楽の源流と言われる宗教音楽を、コンサートホールの構造を生かした劇場ならではの公演へと昇華させ、重層的な声に包み込まれた魅惑的な空間を出現させた。令和3年度には熊野出身のピアニスト・美</p>		

別紙（事後評価書）

術家の向井山朋子が映像、電子音、自然音、ピアノ音を駆使した「KUMANO」で、観客自らが熊野の大自然の中での自己創造活動を疑似体験するかのような神秘的な空間を創出した。

舞踊分野では、平成31（令和元）年度の『ON VIEW : Panorama』は、7年という長期間をかけたオーストラリア、香港との国際共同制作で、当該劇場・音楽堂等は平成30年度から参加した。ダンスと観客の関係性の境界を映像とパフォーマンスを通して探求・問題提起した。令和2年度には、新設された芸術監督のポストに世界的舞踊家の勅使川原三郎が就任し、当該劇場・音楽堂等の事業の柱であるコンテンポラリー・ダンス事業の価値を高めることが大いに期待された。就任記念シリーズとして上演された『白痴』『調べー笙とダンスによる』等に顕著であったように、舞踊、音楽、照明等を統合して生まれる作品は極めて独創的で、上記の期待に応えるものであった。また令和4年度に世界初演されたライブミュージック&ダンス『天上の庭』は、音楽の生演奏に対する勅使川原のこだわりが功を奏し、ホール全体に朗々と響き渡るチェロの独奏とダンスとのコラボレーションを、タイトルどおりの世俗を離れた世界に昇華させることに成功した。

演劇分野では、人材養成事業である「AAF戯曲賞募集・選考」により選出された受賞作の上演が継続的に実施されている。令和4年度の『リンチ』は、「戯曲とは何か？」という受賞作のテーマに対し「上演とは何か？」を問うという挑戦をしたものの、芸術性・創造性における成果は限定的なものにとどまった。

普及啓発事業では、勅使川原振付の世界初演作品として注目された令和3年度の「ファミリー・プログラム宮沢賢治『風の又三郎』」（令和4年度に再演）は、オーディションで参加した地元のダンサーが独特のメソッドを習得しきれず、集客も低調で盛り上がりを欠いた。県民に企画の意図がうまく浸透しなかったこともあり、「愛知の文化的資源を活用したプロデュース作品として国内外に発信する」という目的の達成は、限定的なものにとどまった。

人材養成事業では、「舞台芸術スタッフ人材養成ラボ」が、コロナ禍でもオンラインの活用等により、毎年実施された。自前の講師が育ち、ニーズや課題をうまく洗い出して現場第一の目線で作られた研修プログラムを作成することで県外からも参加者を得る等、継続的な活動を実施している。

以上のことから、独創性、新規性、先導性等に優れた事業が一定数実施され、そのことが当該劇場・音楽堂等の国内での評価の向上につながったと認められる。

（持続性）

事業運営の面では、平成29年3月に策定した「愛知県芸術劇場中長期計画」、及び令和2年3月に策定した「愛知県芸術劇場第2次中長期計画」に沿って事業展開と目標を明らかにし、サービス向上や事業運営の改善にも努めている。

経営戦略面では、平成31（令和元）年度から5年間愛知県より指定管理者として非公募で委任（2期目）されていることから持続的な財政支援が裏付けられているのに加え、令和3年度からは「賛助会員制度」を開始。地元企業にチケットの団体購入促進や外部資金獲得を働きかけ、コロナ禍にあつて15法人の賛同を得たことは、持続性強化のための成果として評価できる。また、専門性の高い職員を有することから国内各地の他の劇場とのネットワーク連携が可能となり、海外ダンス・カンパニーの共同招へい、国内カンパニーのツアー公演を継続的に実現した。

芸術監督のポストの新設によってその任期（4年間）内での中期的な事業計画の策定が

別紙（事後評価書）

可能となったこともあり、持続的なアウトカムの発現・定着に向けて一定程度の成果が認められた。

（総 評）

事業計画はいずれもミッション、ビジョンとの整合性が取れており、新芸術監督の就任を契機としてより新規性、創造性のある芸術活動を目指すという意識づけが認められた。公共劇場として県および市町村、他の公共劇場との連携や地域活性化の取組の重要性もよく意識されている。ただし集客力の向上については、一層の努力が求められる。

令和6年度以降には企画制作体制の一新が予定されているが、持続的かつ顕著な「愛知ならではの」アウトカムの発現に向けて、劇場内外でより緊密で活発な意見交換を行い、事業計画のさらなる一貫性と熱気が生み出されることが期待される。